

寄稿

新時代の被害者支援への期待

朝日新聞編集委員 河原 理子

「被害者の気持ちなんて、わかるんですか？」

新人記者や、大学生に、被害者取材について話していると、時折、こう尋ねられる。記者も、被害者の話を聞く職業のひとつだが、いかに接するのか、どのように社会に伝えるかは、最大の悩みのひとつである。

私は、たまたま被害者家族の話を聴かせてもらうようになり十数年たつ。一つひとつ驚き、教えられ、自分がいかに「わかってないか」痛感してきた歳月だといえる。だから、いまはこう答える。「わかることはむづかしい。けれど、理解しようと努力することはできる」

「支援者」の立ち位置は、さらにむづかしいものがあるように想像する。

「研究者から受ける二次被害」について聞くことがある。自分たちの研究は有意義なものであり、一当事者のあなたより知見を持っている……という響きがあると、被害者は、自分が素材にされてしまったと感じる。

被害者支援でも、下手をすると、「支援者のための支援」「実績づくりの材料」との疑念を招きかねない。

被害者支援ネットワークも、ゼロから基礎をつくる時代から、さらに質が問われる時代に入った。期待することを二つ申し上げたい。ひとつは、社会性を意識してほしい、ということ。社会全体のなかでの動きを意識することは大切だし、説明していくことも大切だと思う。この被害者支援ニュースも、その一環と理解し評価している。これまでの被害者支援は、捜査や裁判への対応を中心に構築されてきた。が、犯人がわからない事件や、海外で起きた事件の被害者もいる。警察に届けない被害もあるだろう。けれどどんな被害者も、地域のなかで生きていく。被害にあっても今より生きやすい社会を、共に作りたい。

また、秋葉原事件のように広域に被害者がいる場合や、海外事件などでは、ネットワーク事務局が力を発揮して、地域での「途切れない支援」を実現してほしい。

二点目。専門性を高める努力とともに、専門的地平か

らあえて身をはがして見返す努力も続けてほしいと願っている。私は、被害者の話を聞かせてもらうなかで、いかに司法用語がわからないか、裁判所が遠い存在か、といったことを教えられた。こうしたことを前提に、付き添い支援や説明が行われるようになってよかった。ただし些末ながらこんな経験もある。被害者から相談され、その地の支援センターを紹介しようとホームページを見たら、いきなり「直接的支援」と出てきたのだが、わかるだろうか？ また、イベントの時にようやく訪ねてきた被害者がスタッフに話しかけたところ、「今日は忙しいんです」と断られて帰るのを見たこともある。忙しいのはわかるけれど、別の言いようもあったのではないか。たえず立ち返る努力は、私自身の課題でもある。

昨秋のフォーラムでは、冒頭に金屏風をたてての表彰式を初めて見た。むろん、この表彰制度が初めてできたからではあるのだが。私たち外部の者にとって、フォーラムは、ネットワークの実際の活動について聞く年1回の機会だ。表彰された方たちの長年の労苦を讃え、ねぎらうことに異論はないが、それは内部の行事ではないかと感じた。あとのフォーラムで、長年ねぎらわれる機会もほとんどないまま、身を削るように活動してきた当事者の方たちがパネリストとなることについて、組織内どのように議論されたのか、気になった。

以上、日々のご努力を承知の上で、勝手なことを書かせていただいた。被害者支援の深化と充実を心の底から願うゆえであり、大きな期待をかけている。

かわはら・みちこ

1961年、東京生まれ。83年に朝日新聞社に入る。社会部記者、文化部次長、AERA副編集長などをつとめる。

著書に『犯罪被害者 いま人権を考える』（平凡社新書、1999年）、『〈犯罪被害者〉が報道を変える』（高橋シズエさんと共編、岩波書店、2005年）、『フランク「夜と霧」への旅』（2012年、平凡社）など。

2000年に、新聞、通信、放送の有志の記者たちと、「地下鉄サリン事件被害者の会」代表世話人である高橋さんと、勉強会を始める。

発行：公益社団法人全国被害者支援ネットワーク